

問題・解答  
用紙番号

57

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、外国語学部、経済学部、経営学部、  
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。  
(一〇点)

- 1 ゆるやかなケイシヤの坂を登り、大学へ通う。  
ア 研究者にソンケイの念を抱いた。  
イ 社会学にケイトウした。  
ウ 多様な事例をケイトウ的に学んだ。  
エ 研究を始めて十年がケイカした。  
オ 近代国家を新たな五つのルイケイに分けた。
- 2 タンチョウな生活から抜け出す。  
ア 熱帯の秘境をタンケンする。  
イ タンスイ湖のほとりにテントを張る。  
ウ センタン技術で作られた分析装置を使う。  
エ タンジュンな仕組みではなかった。  
オ 地下資源が見つからずヒタンに暮れる。

3 調査地の状況をガイカンする。

ア 雨が少なくカンソウした地域だ。

イ 新種の昆虫をカンサツする。

ウ カメラのレンズをコウカンする。

エ 発見した昆虫に関する研究書をカンコウする。

オ 本の売れ行きから関心の高さをジツカンした。

4 伝染病のコンゼツを願う。

ア コンセキがどこにも見当たらない。

イ ささまざまな機関に協力をコンガンする。

ウ 突然の申し出にコンワクする。

エ 国際情勢がコンメイを深めている。

オ 将来にカコンを残す。

5 長期休暇でタイダな生活を送る。

ア ダミンを貪るのにも飽きてしまった。

イ ダサクとはいえ読むものがあるのはありがたい。

ウ 我ながらすっかりダラクしてしまった。

エ 今の私はダキすべき存在だ。

オ 現状はダトウな結果といえるだろう。

## II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

\* 社会生物学を巡る激しい論争は、広く社会に関わる問題を扱う学際的な分野の特徴を物語っています。そうした分野は、学術コミュニティを超えた政治的な論争にも巻き込まれやすいのです。<sup>1</sup>

人文社会系に関わりの深い事例をあげましょう。たとえば、フェミニズム、カルチュラルスタディーズ、ポスト・モダンズム、科学技術社会論など、いずれも二〇世紀後半に論争の対象となりました。形としては「科学」であろうとしたマルクス主義などもその例に入れてもいいかもしれません。

「総合系」の環境科学は、現在進行形の国際政治と関わるだけあって、更にダイナミックです。政治、産業界、メディアを巻き込んだ議論の戦場となってきました。特にアメリカでは地球温暖化が起きるかを巡り、科学者と政治家が双方の陣営に分かれて争ってきたことがよく知られます。

共和党は温暖化問題に懐疑的で、民主党は積極的な関心を向けてきました。二〇〇九年には、イースト・アングリア大学のメールサーバーから気象学研究者のメールが流出し、その会話の内容から、地球温暖化の根拠とされたグラフに改ざんがあったのではないかとの疑惑を抱いた論者がメディアを騒がせたこともありました（気候研究ユニット・メール流出事件あるいはクライメートゲート事件）。

学際的な研究が学問の世界に閉じず、このような政治論争に至ってしまう背景には、主に次の二つの要因があります。第一に、まさにその分野が、社会の中にある複雑な課題を扱うことができているために、学術コミュニティを超えて人々の関心を惹きつけて、論争が誘発されやすくなります。

第二に、多くの人に関わるのに、そうした複雑な課題を扱う研究は、まさに複雑であるがゆえに、はつきりと物事に白黒を付ける答えは出せません。ゆえに、対立が継続してしまいます。これは、人文社会科学だけではなく、自然科学的な方法論が使われている場合でもさほど変わりません。

自然科学と社会の双方が関わる複雑な問題は、それが切迫した主題であるほど、自然科学をもつてしても、明確な答えがすぐに出せない場合が多いのです。たとえば、公害による健康リスクのように、時間をかけて（あるいは人体実験により）検証すれば答えが出るかもしれないが、社会的にそれは困難であるというような場合があります。もしくは倫理的な問題のように、もともと科学では答えが求められない性質の問いを含んでいる場合もあります。クローン人間を造ってよいか、といった問題がその例です。

特に現実の社会問題が関わる場合、時間の問題は重要な要素です。たとえば地球温暖化の場合は、「予測の正しさが証明されたときには相当な犠牲者が出てしまう」というジレンマが存在します。<sup>2</sup>

そのため、研究が導く解答が現実だとは言い切れない状況でも、「どうするべきか」という意思決定に貢献することが期待されます。科学的に確定が困難な要素を含む問題だが、「今現在」社会的

合意が必要となってしまうのです。

地球温暖化問題においては、問題が起きる前に手を打つ「予防原則」の立場から、気候変動条約やCO2削減といった様々な政策的措置が動き出しました。結果として、反対する人は「科学的な結論が不確定なうちに政治が動き出した」との印象を抱き、研究の不備や政治的偏向を主張したりして論争が続くことになったのです。

このような状況を否定的に捉えて、政治論争が起きるような学問はまともでない、政治的中立性がないとの結論に飛んでいく人もいます。あるいはその逆で、科学的な検証を行って出した答えに反対する人がいるなんて信じられない、理性的ではないと叩く人もいます。

<sup>3</sup> 私自身は、カントのように、論争の存在自体を肯定的に捉える立場です。それも、彼よりは一歩踏み込んで、ある学問が人間社会に関わる切実な対象を扱うほどに、その学術的な論争と、政治的論争との間の境目が不明確になっていくのはやむを得ないし、(A) 論争が必要だと思っています。それは、人間の認識能力の不完全さと、対象の複雑さとが合わさったとき、何らかの政治性が生まれてしまうことは避けがたいと考えているからでもあります(なお私は、「政治的(political)であること」と「党派的(partisan)であること」を区別しています。前者は「市民生活においてどの価値を優先するか」ということ、後者は「誰の味方か」という人間関係的な側面のことです)。

環境科学の例が示すように、どんな学問分野をもつてしても、完全に世界を認識し、記述できるシステムはありません。もしそんなシステムがあったら、それは X に他ならないでしょう。それ以外のものは、どれだけ確かな方法を駆使したとしても、不完全なものでしかあり得ません。何らかの形で、必ず情報が欠落しているのです。どの情報を減らすかは各分野の選択であり、それは一種の価値観の反映でもあります。

(B)、複雑な系、たとえば経済活動のような人間社会の営みや、自然界であっても気象現象のような複雑な対象の予測はしばしば当たりません。すると、研究結果の導く結論をめぐり、対立する意見が不可避に生じるようになります。特にそれが、経済政策や環境政策のように、何らかの具体的なアクションを想定している場合は尚更です。複雑な系を扱うがゆえの不確実性も政治を呼ぶのです。

そのことに加えて、そもそも、ある社会的課題を扱う／扱わない、という選択自体が、既に一定の政治性を帯びています。研究に参与する研究者がどれだけ誠実に、理性的に、学問の基準に則して行動しようとも、あるテーマを選ぶというその行為自体は、社会における何らかの立場表明としての意味を持つのです。このことに、人文社会系、理工医系の差はほとんどありません。

たとえば、「適切な多数決投票の方法を数学的に検証する」のようなテーマを研究したい経済学者がいるとしましょう。一見、特別な政治性は感じないかもしれませんが、独裁政権の支配する国

であれば、「国民による多数決を行う政体を想定している」ために警戒されるかもしれません。

それは独裁政権がおかしいだけではないかという話ではなく、ここで言いたいのは、少なくともそのようなテーマが彼らにとっては全く「中立」に映らないだろうということ。もし私たちにとってその主題が「中立的」に見えるとしたら、それは私たちが「民主主義は当然のこと」という価値観が普及した地域において、他の価値観をさほど想定せずに済んでいるからです。

理系が関わる例でも事情は変わりません。一九七〇年代〜八〇年代の日本では、環境問題を研究テーマに選ぶ理系学生は民間企業での就職が大変になるといわれていました。マジヨリティが環境問題に関心がなかった時代、敢えて環境に関心を持つことは「偏ったこと」とみなされかねなかったのです。現代ならこの感覚はむしろ逆でしょう。

「地球環境を気にかけること」も「民主主義を自明視すること」も、それぞれ一つの価値観であり、政治的信念の一種です。ただ、その価値観がマジヨリティにとって一般的になっている時代、地域ではそのことが目立たないだけです。

もちろん、「テーマの選択が政治性を持つ」ことは仕方ないにしても、それは研究の過程に政治性が入り込むこととは違うのではないか、という指摘は可能です。

たとえば、公害問題や、歴史上の虐殺事件といった問題に対し、ある組織や人物にとって不利になる証拠を隠蔽した上で論文を書いたとしたら、それは「政治的」かつ「党派的」なデータの隠蔽ですし、研究不正に等しい行いです。

論争になりやすいのは逆のケース、すなわち証拠として用いる材料を広げる場合です。たとえば、教育を受けた役所の人間が残した文書記録や、定量的に計測可能な証拠といった従来も用いられていた判断材料だけではなく、知的障害をもつ人の数十年前の記憶や、コンピュータによるシミュレーションなど、確実さにおいて劣る要素を持ち込む場合、前者は「実証的」だが後者は違うとして、拒否されることがあります。そして、そのような不確かなものを研究の材料に使うのは、政治的な意図があるからだと言弾されたりするのです。

事例ごとに事情は違うので、一般化は困難なのですが、科学史を踏まえて私が思うのは、どちらかといえば、検証する対象を増やす方が、検証の厳密さを求めてそれを避けるよりは実りが多いのではないかということです。

先の例でいえば、二〇一八年現在、日本では過去の優生政策により障害者に対する強制的断種手術が行われたことが問題視されていますが、これも最初は当事者の証言を真剣に聞き、証拠となる資料を探した歴史家の努力がありました。また、地球温暖化問題が二〇世紀半ば、最初に話題になったときには、それがシミュレーションに基づく推論であることが問題視されましたが、現在はそうした手法が科学的推論の一つとして認知されています<sup>4</sup>。

以上のことを踏まえるならば、むしろ、「複雑な対象を前にして、価値中立を掲げることが持ち

「うる政治性」こそが念頭に置かれなければなりません。すなわち、マジョリティの価値観に浸っているために自らの政治性が自覚できていない状態のことを、「中立」という名で呼び変えていないかどうかを、改めて問い直す必要があるでしょう。

それに加えて、人間の理性の限界という問題もあります。実際、本人は真剣に研究をしている場合でも、無意識のバイアスで、ある証拠を完全に見逃し、自分の論点を支持する証拠ばかり集めるということがありうるからです。一九世紀において、女性の知性が男性に劣るとの見解を出したいくつかの研究には、明らかにこのような傾向がみられました。

同時に言えるのは、「学問は現実の対象に近づくほど不可避の政治性を帯びる」ということを踏まえて、それでも学問的方法論に根ざして言葉を紡ぐことの大切さです。物理学のような法則定立的な方法にしる、歴史学のような個性記述的な方法にしる、定量的な社会学のようにその中間的なものにしる、それは世界を認識する異なったやり方として、数世代にわたり様々なテストを生き残り、受け継がれてきた人類の遺産なのです。

私たちはバイアスのかかったやり方でしか世の中を見ることはできませんが、諸分野の方法というのは、地域や文化を超えて人々が選び取ってきた、いわば、体系性のあるバイアス<sup>5</sup>です。体系的なやり方で、違う風景を見て、それを継ぎ合わせる。または違う主張を行いながらも、それを多声音楽のように不協和音も込みで重ねあわせていく。そのことにこそ、様々な分野が存在する本当の意義があるのではないのでしょうか。

(隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』一部改変)

\* 社会生物学を巡る激しい論争……社会生物学は、ダーウィンの進化論を用いて、生物の集団的行動を説明しようとする試みであるが、様々な人間社会の現象もその考察の対象としたため、政治的な対立を交えた激しい論争が起きた。

問一 空欄 ( A ) ・ ( B ) に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- |   |   |         |   |   |      |
|---|---|---------|---|---|------|
| A | ア | じつのところ  | B | ア | あるいは |
|   | イ | それどころか  |   | イ | そのため |
|   | ウ | だからこそ   |   | ウ | ところが |
|   | エ | とはいふものの |   | エ | もしくは |
|   | オ | にもかかわらず |   | オ | もつとも |

問二 傍線部1「学術コミュニティを超えた政治的な論争にも巻き込まれやすい」とあるが、学際的な分野が政治に巻き込まれるのはなぜか。次のア～オのうちから、適切なものをすべて選びなさい。

ア 学際的な研究は、様々な分野の専門家が関わっているが、その中には当然ながら政治の専門家も含まれており、問題解決に影響を与えるから。

イ 学際的な分野は、社会の中の複雑な課題を扱うことから利害関係の対立が起きやすく、学術的な是非よりも、現実的な利益が優先されるから。

ウ 学際的な研究は、広く社会に関わる問題を研究対象とすることができるので、研究者や専門家以外の人々も興味をもちやすいから。

エ 学際的な分野は、多くの人が関わる複雑な問題を扱うが、その複雑さのために、明確な答えが出せなかったり、そもそも答えがない場合もあるから。

オ 学際的な研究は、それぞれの研究方法をもつ各分野の専門家が集まるが、研究方法の選択にあたっては政治的な思惑が働くから。

問三 傍線部2「時間の問題は重要な要素」とあるが、時間の問題が論争を引き起こす理由として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 社会が関わる複雑で現在進行形の問題は、その答えを出すための研究方法としてどのようなものを用いるかで意見が分かれ、その検討に時間がかかるから。

イ 学際的な研究には時間がかかり、今すぐ答えが求められている社会的な問題への解答を提出することができず、その間にさらに様々な見解が出されるから。

ウ 切迫した問題に対して早急に社会的合意を形成するために、研究者は科学的にはまだ確実とはいえない答えを敢えて提供し、論争を起こそうとするから。

エ 問題に対して今すぐ対策をとろうとすると、今現在の解答が正しいことを証明するよりも、正しいと見なして解決策を提案することの方が重要視されるから。

オ 問題が起きる前に手を打つならば、科学的な結論が不確定な状態でも動き出さなければならず、問題に対する立場によって、その措置の受け取り方が異なるから。

問四 傍線部3「私自身は、カントのように、論争の存在自体を肯定的に捉える立場」とあるが、筆者がこのような立場をとる理由として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。  
ア 研究の対象が人間社会と深く関わるものであるならば、学問と政治とを融合させて論争をすることが有益だから。

イ 人間は世界を完全に認識することはできず、加えて扱う対象が複雑な問題である場合、そこには必然的に政治性が生まれるから。

ウ 複雑な問題を研究するとき、様々な分野がそれぞれの方法で携わることになり、問題の認識や解決を巡って政治を巻き込んだ対立が起きるから。

エ 人間社会の中の複雑な問題を解決するための研究には、政治的に中立ではないかもしれないが広く一般の人々からの意見も取り入れた方がよいから。

オ 複雑な問題に対して、それぞれの成果を重ね合わせて解決に導こうとしている様々な学問分野がもつ独自の方法論には、既に政治性が内包されているから。

問五 空欄 X に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

ア この世界そのもの

イ さらに複雑な現実

ウ その記述自体

エ 抽象化された本質

オ 理想的な知性

問六 傍線部4「複雑な対象を前にして、価値中立を掲げることが持ちうる政治性」とあるが、これについて述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 研究者自身がいくら中立性を保とうとしても、あるテーマを研究の対象として選ぶことが既に政治的な行為である。

イ マジョリティが当然視している価値観を否定する研究は、一見中立的に見えるが、政治的に偏ったものになりやすい。

ウ ある特定の立場の利害を考えた研究は当然政治的であるので、中立な立場であることを貫きそれを表明すれば、政治とは離れられる。

エ 十分に確かであるといえない方法を用いるのは政治的であるとしてそれを斥けるのは、中立であろうとするあまり政治的になってしまう。

オ 研究をする以上、価値中立であることは不可能だということを認識していない研究者は、自覚なく政治的論争に巻き込まれてしまう。



問七 傍線部5「体系性のあるバイアス」とはどのようなことか。最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア ある価値観がマジョリティにとって一般的であるとは、多くの人や社会でその価値観がよしとされ、共有されているということであり、偏ってはいるもののそこには体系性があること。

イ 人間の理性には限界があり、本人も気づかないうちに偏ったものの見方をしているが、本人の中に確たる信念があり、一貫して誠実に研究しているならば、その偏りには体系性があること。

ウ どのような学問分野であっても、その固有の価値観に従い情報の取捨選択を行うが、その方法は長い年月をかけて選択され、検証され、継承されてきたという意味で体系性があること。

エ 学際的な分野では、それぞれの分野の方法を用いて研究を行い、その主張を重ね合わせていくことによって、それぞれの分野の偏りを打ち消しあい、結果として体系性が生まれること。

オ 社会に関わる複雑な問題を扱う研究では、常に地域や文化、分野の価値観がぶつかるが、その論争の中から生まれた新しい価値観には、各分野等の価値観が統合された体系性があること。

### III 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

世界遺産を取り巻く国際情勢に目を向けてみよう。条約の採択から半世紀近く。さすがに制度疲労<sup>A</sup>とでもいふべき矛盾が目立ってきたように思う。噴出する様々な課題は条約の理念そのものを揺るがし、「制度としては寿命を迎えた」との指摘さえ聞こえてくる。以下、将来への懸念材料をいくつか列挙してみたい。

さしあたっての喫緊かつ最大の難題は、どこまで登録数を許容するか、ではないだろうか。この議論はたびたび組上<sup>そじょう</sup>に載ってきたが、毎年の審議数を限定する以上の抜本的な対策はみられないようである。もちろん青天井<sup>てんせい</sup>も選択肢のひとつではある。だが、それは世界遺産リストの希少性や代表性に抵触し、その変質を促す危険性を常に抱える。ひいては保護制度自体の存立を危うくしかねず、ユネスコの運営に与える影響も小さくない。

世界遺産条約はその関心の高さからユネスコの条約で最大の成功例と言われるだけあって、世界では新規の登録を求める声が続かない。一〇〇〇件の大台を突破してなお年々増加し続ける現状を見れば明らかだろう。この数を多いとみるか少ないとみるかは人それぞれだが、現実問題として件数の増加が登録資産への十分な保全管理やそれにかかる資金の確保を難しくし、通常の事務作業も支障<sup>きた</sup>を来し始めているのは事実だ。

そこでユネスコは登録の抑制策を順次、打ち出してきた。第二八回世界遺産委員会(二〇〇四年、中国・蘇州<sup>そしゅう</sup>)では、新規物件の審議は毎年最大四五件、締約国の推薦は最大二件、少なくとも一件は自然遺産にすることとし、第三五回委員会(二〇一一年、パリ)では、各国の推薦数は引き続き最大二件としながらも、少なくとも一件は自然遺産か文化的景観で、とされた。二〇一六年のパリでの臨時会合ではさらに踏み込んで、一度に審議できる上限を二〇二〇年以降、現行の四五件から三五件に減らして一国一件に制限することが決まった。

<sup>2</sup> 度重なる改訂は、ユネスコがこの問題を深刻に受け止めていることの表れだ。ただ、審議の上限や推薦枠の制限は、同時に審査の厳格化を生むことにもなる。委員国は任期中の推薦自粛を求められているが、国々の思惑も絡んで期待どおりというわけでもなさそうだ。

「世界遺産条約履行のための作業指針」に最終的な登録数への上限が特に定められているわけではない。だが、数の増加は資産価値の相対的な低下を引き起こす。なぜなら世界遺産には常に代表性や希少性がつきまとうからだ。「世界的に貴重な宝」というイメージが定着しているからこそ、適切な景観の維持など登録物件に課される厳しい規制に納得もできるわけだが、類似物件が増えて希少性が減じ、それを守るだけの経済的メリットがないとみなされれば、必然的に資産への関心は薄れてしまう。結果として、遺産保護という本来の目的さえ失うことになりかねない。

ところで、世界文化遺産と聞いて、みなさんの脳裏に浮かぶのはなんだろうか。エジプトの巨大

な。ピラミッド、密林にたたずむカンボジアのアンコール・ワット、欧州の壮麗な教会群や古代ローマの遺跡、ペルーの空中都市マチュ・ピチュ、それとも中国歴代王朝によって造営が引き継がれてきた長大な万里の長城……こんなところだろうか。だが、誰もが認めるめばしい記念物は、ほぼ出尽くしたとも言われる。近年リスト入りした物件で、私たちが登録前から知っていたものはどのくらいあるだろう。

もちろん有名だからよいというわけではないけれど、文化遺産においては、地域性が強くなければなるほど世界中の人々が共有できる情報は低下し、推薦国と他国との認識に齟齬そごが生じるのは避けられない。それゆえ、国境を越えて認められるだけの普遍的価値を主張するために、逆に地域の特異性を強調せざるを得ないというジレンマが生じる。そこには普遍性と多様性を両立させるためのレトリックが氾濫はんらんしているように思う。

登録物件の増加は、文化遺産を評価するイコモスにも影響を与えかねない。イコモスは世界中に一人もの専門家を抱える国際NGOである。ユネスコの諮問機関といえれば聞こえはいいが、財政的には苦しく、世界遺産の仕事にしても、担当者Cの手弁当てんべんたうによるボランティアに近いようだ。

推薦資産の学術的評価は複数の専門家によって検討されるとはいえ、その候補が特定地域の文化に密着してローカルになればなるほど、それを正当に評価できる専門家に限られるのはやむを得ず、結果、客観的での確な判断を難しくしてしまう。それはイコモスの勧告や世界遺産委員会の見解に不安定化や不一致をもたらす一因にもなっている。下位の勧告から上位への格上げ決議は日常茶飯事、逆に、一度は「情報照会」に落ち着いた評価が、その後の議論で「登録」どころか「登録延期」に後退するような例もある。

二〇一六年に三度目の推薦で登録された、東京・上野の国立西洋美術館本館を含む「ル・コルビュジエの建築作品」でも、そのプロセスは一進一退を繰り返した。二〇〇九年の世界遺産委員会は「登録延期」のイコモス勧告から「情報照会」に格上げしたものの、二〇一一年にイコモスは改めて「不登録」勧告を言い渡し、これに対して委員会が「登録延期」を決議するという応酬が続いた。

これほどの迷走でなくても、延期勧告が登録決議に覆される例は常態化し、多いときは過半数にのぼることもある。

こんなイコモス勧告と世界遺産委員会決議の不一致は、政治的駆け引きだけが原因ではない。学術的には素人の外交官の集まりである委員会を納得させられるだけの明確な判断を、専門家集団たるイコモスでさえ下しにくい資産が増えている状況も無関係ではないと思われる。それは、OUV\*の重要な要素であるユニバーサルという汎世界的な共通認識が見えにくい物件、あるいはOUVへの複数の視点やアプローチを可能にする複雑な物件が増えている、ということでもある。

根本的な解決は難しい。だが、ただ指をくわえて待つているわけにもいかない。たとえば、一年

に一回開かれている世界遺産委員会を二年に一回、あるいは三年に一回にして、その推薦候補の見極めにじっくり時間をかけるのも一案だろう。延期勧告のあとに、委員国が推薦国から詳しい説明を受けてようやく理解が深まり、勧告が覆るくらいならば、イコモスでも最初から十分な時間をかければよい。イコモスと委員国との健全な意思疎通がもつとあつてもいい。少々乱暴かもしれないが、そうすることで、評価が難しくなる一方の推薦物件への対応も少しは効率的になるし、アップストリーム・プロセスの負担軽減や「対話」に費やせる時間も確保でき、ひいては登録数の抑制にもつながるのではないだろうか。

私たちは、遺産の価値には X な指標があると思いがちだが、それは幻想にすぎない。代表性や希少性を持つということは、常にレラティブ（相対的）な関係が資産間に作用するということだ。したがって、登録物件の増加は相対的な価値の低下を引き起こす。そしてそれは最悪の場合、既存物件の、リストからの削除となって現れる。

<sup>4</sup> 苦労した末の世界遺産登録、まさか抹消なんて——。誰もが、そう思うに違いない。けれど、それはすでに現実となっている。保護より開発を優先した「アラビアオリックスの保護区」（オマーン）や、世界遺産より架橋を市民が望んだ「ドレスデン・エルベ渓谷」（ドイツ）などだ。

「アラビアオリックスの保護区」は自然遺産として一九九四年に登録。年間降水量はほぼゼロの砂漠地帯、中東ジダッド・アル・ハラシース平原には面積二万七五〇〇平方キロ、四国の一・五倍も保護区が設定されていた。二〇〇七年、オマーン政府は保護区内での開発を求めて保護区の縮小方針を決定。ユネスコの懸念をよそに、世界遺産の解除を自国政府が求め、リストからその名は消えた。

白い肢体に黒い顔の隈取りが印象的なアラビアオリックスはユニコーンのモデルになったとも言われる風変わりな動物で、なんとか数も回復し始めて絶滅の危機を脱しようとしていた。しかし、この希少種の存在も、開発という経済行為の前には障害としか映らなかつたようだ。

そしてもうひとつが、二〇〇九年に削除された「ドレスデン・エルベ渓谷」である。かのザクセン選帝侯、アウグスト強王が築いた「百塔の都」で、二〇〇四年の登録だ。この一帯は有数の工業地帯でもあったため、第二次世界大戦の空爆で一時は瓦礫の山と化した<sup>がれき</sup>が、在りし日の姿が忠実に再現された。

数々の芸術作品に謳われたドレスデンを貫くエルベ川。ここに六〇〇メートル余りの架橋計画が浮上した。かなり古くから計画されていたらしく、二〇〇六年には景観破壊が危惧されて、危機に瀕した遺産、いわゆる「危機遺産」リストに記載されたが、それを押し切つて利便性を求めた住民投票の意思を反映し、建設の決定がなされた。生活環境の改善と景観保護をめぐる綱引きが、ついに世界遺産の抹消にまで及んだのである。

ドレスデンは、東洋陶磁コレクションで有名なツヴィンガー宮殿をはじめとする壮麗な石造りの

建造物群に交じり、鉄骨構造の造形美を誇るロシユヴィツァー橋やのどかなブドウ畑などもあり、多彩な顔を見せてくれる。問題となった橋もこの歴史的風景に溶け込む一要素として取り込むことはできなかつたものだろうか、いまさらながら思う。

なお、二〇一八年にバーレーンの首都マナマで開かれた第四二回世界遺産委員会では、英雄ティムール誕生の地、ウズベキスタンの「シャフリサブス歴史地区」について登録抹消の可能性が議論されたようだ。過度の観光地化が問題となり、二〇一六年に危機遺産となっている。とりあえず結論は先送りになったようだが、予断を許さない。

住環境の整備やよりよい暮らしの追求は地元社会の当然の権利であり、非難されるべきものではない。ただ、世界遺産をめぐる選択肢の決定にユネスコや国際社会が地域社会の意思を尊重して参画を促すのであれば、住民が世界遺産を放棄してまで生活の向上や利便性を選ぶことにも首肯せざるを得ない事態を想定しておく必要がある。人類共通の宝というユネスコの思いに、地元社会や所有者の意向が必ずしも一致するとは限らないのだ。

もともと「ドレスデン・エルベ渓谷」の場合、どれだけの住民が世界遺産抹消の可能性について知っていたのかはよく指摘されるところ。はたして、住民に世界遺産への影響がもつと周知されていたら結果が変わったかどうか、それはわからない。が、そこに暮らす人々には生活改善への切実な声が当然あったのだろうし、政府や自治体においても複雑な国内事情への配慮や葛藤があったことは察せられる。連邦制というドイツの統治形態も、この決定に無関係ではなかったはずだ。

いずれにせよこれらのケースは、自国や地元住民らが世界遺産のメリットよりそれ以上を望んだ結果であることには違いない。開発や住環境の改善と世界遺産が両天秤にかけられた末に「遺産」が切り捨てられたわけだ。ドイツの場合、それが住民投票を介した民主的な決定だったことは、裏返せば、世界遺産が求める理想の限界を露呈したと言え、私たちは、絶大な人気を誇ってきた「看板」の相対的な低下、ブランド力のかげりを突きつけられたのである。

経済性や生産性向上のための開発にせよ、住みよさを追求した整備にせよ、様々な理由でリスト抹消を迫られる遺産はこれからも現れるだろう。世界遺産の増加が今後、その傾向を加速させないとは限らない。

(中村俊介『世界遺産—理想と現実のはざま—』一部改変)

\* OUV……顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)。

問一 波線部A～Cの言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

A 制度疲労

- ア ある制度によって社会への負荷が高まっている状態
- イ ある制度が処理可能な限界まで利用されている状態
- ウ ある制度によって政治的な危機が起こりそうな状態
- エ ある制度がもはや現実と合わず十分機能しない状態

B 青天井

- ア 正しい数値を決めること
- イ ほったらかしにすること
- ウ 公開で物事を決めること
- エ 限界なく増加が続くこと

C 手弁当

- ア 仕事先で弁当がふるまわれること
- イ 仕事の経費を自分で負担すること
- ウ 仕事の報酬が現物支給されること
- エ 昼食時も休まずに仕事をする事

問二 空欄  X に入る最も適切なものを、次のア～エのうちから選びなさい。

- ア 専門的
- イ 絶対的
- ウ 現実的
- エ 理想的

問三 傍線部1「どこまで登録数を許容するか」とあるが、次のア～オについて、世界遺産の登録数増加によってもたらされることとして、適切なものにはa、適切でないものにはbを、それぞれマークしなさい。

- ア 新たな登録のために、既存の世界遺産をいくつか登録抹消しなければならないこと。
- イ 登録数増加により登録資産の十分な保全管理や必要な資金確保が容易になること。
- ウ 代表性や希少性が失われることで世界遺産の資産的な価値が相対的に低下すること。
- エ 世界的に著名な記念物がほぼ出尽くし、地域性が強い世界遺産が増加すること。
- オ 地域の特殊性を根拠として世界的な普遍的価値を強調する世界遺産が増加すること。

問四 傍線部2「度重なる改訂は、ユネスコがこの問題を深刻に受け止めていることの表れだ」とあるが、ユネスコの世界遺産委員会が文化遺産の登録抑制のためにこれまでに行った取り組みとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 世界遺産委員会は、審議の上限数の他にも、複数の物件を推薦する際に自然遺産や文化的景観などへの申請を求める推薦枠の制限を定めた。
- イ 世界遺産委員会は、今後、文化遺産の審査を行わず、自然遺産と文化的景観のみ新規の推薦を受け付ける方針を定めた。
- ウ 世界遺産委員会は、委員国による新規の世界遺産の推薦を禁止するとともに、世界遺産委員会の決議を厳格にした。
- エ 世界遺産委員会は、文化遺産の事前評価機関を変更し、従来よりも複雑な評価基準に基づく勧告を求めた。
- オ 世界遺産委員会は、まだ世界遺産が登録されていない国に限定して文化遺産の推薦を認める方針を定めた。

問五 傍線部3「イコモス」に関する説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア イコモスは、世界遺産に推薦された物件の学術的評価をおこない、世界遺産委員会と協議する。

イ イコモスの勧告は、世界遺産への登録を決める際に世界遺産委員会の決議より強い効力を持つ。

ウ イコモスの内部でも、専門家と外交官のあいだで意見がわかれることがしばしばある。

エ イコモスの勧告の内容は、これまでの世界遺産委員会の決議の内容と完全に一致している。

オ イコモスはユネスコの諮問機関として文化遺産の評価・勧告を行っている国際NGOである。

問六 傍線部4「苦労した末の世界遺産登録、まさか抹消なんて」とあるが、2つの世界遺産〔アラビアオリックスの保護区〕および「ドレスデン・エルベ渓谷」が登録抹消された共通の理由として、最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

ア 世界遺産としての利点よりも、現地社会の意向が優先されたから。

イ 周辺地域が過度に観光地化したことで世界遺産の希少性が失われたから。

ウ 現地社会に十分な保全管理体制がなかったことで世界遺産が崩壊したから。

エ 世界遺産周辺の急激な自然環境変化により、世界遺産の損傷が進んだから。

オ 住民が登録抹消の可能性を理解しないまま、住民投票で決議されたから。

問七 傍線部5「絶大な人気を誇ってきた「看板」の相対的な低下、ブランド力のかげり」とはどのようなことか。最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

ア 世界遺産の新規登録を求める声は絶えないが、登録反対運動も大きく増加していること。

イ 世界遺産の経済的価値が失われたので、ユネスコさえも大幅減収に見舞われていること。

ウ 世界遺産の中には、現地の人々に必ずしも高く評価されなくなっているものもあること。

エ 世界遺産のブランド力低下で、観光産業による地域振興を放棄する現地社会があること。

オ 世界遺産の数が増えたことで、本来の目的に反して現地の開発競争が激化していること。